

主任司祭中心の教会

*食べさせてくれる教会

明治初期の「キリシタン発見」当時、日本の信者たちの教育レベルは、皆無に等しく、宣教師たちの懸命な努力もあったが教育の機会に恵まれる信者は、ほんの一握りであった。また第二次大戦後、昭和30年代までは、多くの人々にとり義務教育を受けることが精一杯であり、高等教育を受け、専門分野の知識を有する人々はごくわずかであった。

上記の時代背景に加え、長い教会の歴史の中で、その時代の最先端で最高の教育を受けていた聖職者は、信徒から見ると、「司祭は、神様の次に何でもできる存在」だったといえる。

したがって、第2バチカン公会議までの小教区像は、「主任司祭が祈り・研究し・実行し・責任をとる」という形にならざるを得なかったものの、それ故にすばらしい成果を収めることもできた。

私たちは、明治時代に活躍された長崎教区出津教会のド口神父様に、その理想的な姿を見ることが出来る。



主任司祭中心の教会

左の絵は、主任司祭が中心的な働きをしている小教区の姿を表している。

すべてを計画することが主任司祭の仕事。ミサの時間を決め、その準備、ミサ後のお知らせ、病人訪問、告解を聞き、結婚式・葬式の司式、問題を抱え訪ねてくる人々への助言など。多くのことが期待されている主任司祭には、応じることができないことも少なくはないものの、そのすべてを果たそうと努力すればするほど、疲れてしまう。

この絵に描かれた小教区の信徒の動きとして、家族連れ、二人一組、あるいは一人で来る人もみられる。彼らそれぞれをつなぐものは、共通の信仰。共に聖堂に立ち、声をそろえて祈り、普遍（カトリック）教会や自分たちの小教区に対する共通の忠誠を分かち合う。信徒たちは、主任司祭をリーダーとして認め、小教区への所属に幸福感と主日のミサにあずかり、また様々な秘跡を受けられることに充足感をおぼえている。信徒のこの「受身的」な態度は、旧教会法の規定に従ったものである。1983年、第2バチカン公会議の精神に基づき、旧教会法は全面改正され、新教会法には、信徒の役割が肯定的かつ積極的な調子で記されているが、私たち信徒の態度ははまだ「受動的」で、旧教会法の精神が心の中に生き残っている。

絵の中に描かれている旗の周りに集う人たち、それは信心会や種々の活動会に参加している人たちを表している。共に祈る、一緒に聖書を勉強する、病人訪問をする、教会に来ていない人を訪問、貧しい人々を助ける、聖堂を掃除する、などの活動会が活発な小教区もある。このような小教区では、主任司祭が常に信徒の指導者であり、信徒はしばしば自分たちを主任司祭の手足だと考える。